

幼児における「ふざけ行動」の意義

B3H006 堀越 紀香

主査：佐久間路子 副査：無藤 隆（指導教員）・藤崎眞知代・廣澤満之

1. 問題と目的

子どもはよくおかしい行動をして、ふざけることがある。この「ふざけ行動」は一見あまり意味のない行動のようだが(平井・山田, 1989), 仲間との親和的欲求の表れ(McGhee, 1979/1999)とされている。しかし, 単にその場を楽しむ働きを持つだけでなく, 仲間関係や状況を操作するような役割を持っているのではないか。また, 加齢とともに, 仲間関係や状況を操作・対処する機能も向上するのではないか。それらの対処方略スキルは, 幼児教育において周縁的であるふざけ行動を積極的に位置づけられないだろうか。

幼児期のふざけ行動に関連する研究として, ユーモアや笑い, 攻撃的笑い(McGhee, 1979/1999; 平井・山田, 1989; 友定, 1993; 岡林, 1995; Martin, 2007/2011; 伊藤・内藤・本多, 2009; 伊藤, 2012), じゃれ合い遊びと攻撃的笑い(Smith & Lewis, 1985; Boulton, 1993; Pellegrini, 2013; Lillard, 2015), 遊戯的からかい(中野, 1994; 牧, 2009; 牧・湯澤, 2011)等がある。幼児のユーモアについて, McGhee(1979/1999)は「不適切な, 文脈から外れた事象を含む不調和な関係の知覚が, 全てのユーモア経験の基礎となる」とし, 不調和 incongruity を強調した。友定(1993)は, ふざけ・おどけも含めたユーモアは, 親しくなりたい気持ちの表れとする一方で, 攻撃性やタブーなど望ましくないものの存在も指摘した。認知的側面と社会情動的側面, 否定的側面と肯定的側面が両極的に取り上げられる点が特徴的である。

本研究では, 以下の2点を検討することを目的とする。

- 1) ふざけ行動の種類とその機能を同定し, どのように展開するのかを検討し, 年齢や性別による違い, 仲間関係との関連, その変容プロセスを検討する。
- 2) ふざけ行動の遊戯性による円滑なコミュニケーションだけでなく, 不安定な状況や揺れへの対処, ふざけと相対する集中・没頭とのつながり等について, ふざけ行動の二面性・両極性を踏まえて考察し, 幼児教育におけるふざけ行動の積極的な位置付けを試みる。

なお, 本研究では, ふざけ行動を「行為者が相手から笑いを取るきっかけとなる, 関係や文脈から外れた不調和 incongruity でおかしい行為であり, 時に他の相手へ伝染する行為」と定義する。

2. 本論文の構成

本研究の構成は、以下の通りである（図1）。第1章では、ふざけ行動に関連する研究を取り上げて概観する。第2章以降では、ふざけ行動の遊戯性と二面性・両極性を念頭に置きつつ、保育場面で観察される幼児のふざけ行動を「ふざけの発達的变化」、「個人と仲間集団でのふざけ」、「ふざけと遊びとの関連」の視点から検討していく。第7章では、幼児期のふざけ行動の意義として、円滑なコミュニケーションを促す役割、困りや葛藤・揺れへ対処する役割、ふざけと相対する集中・没頭での学びを支える役割について取り上げ、ふざけ行動の二面性・両極性に伴う曖昧性と支援性について考察し、幼児教育におけるふざけ行動への積極的位置付けを試みる。



図1 本研究の構成

3. 方法

自然観察

本研究では、2つの幼稚園において、長期的な自然観察を実施した。

1) 対象・観察時期：(1) 研究1, 研究2, 研究3において、私立A幼稚園のコホート1について3年間の縦断的な自然観察を行い、3歳児10月から5歳児2月まで取り上げた。

(2) 研究4は、同じく私立A幼稚園のコホート2について2年間の自然観察を行い、4歳児10月から5歳児3月まで分析した。

(3) 研究5は、国公立B幼稚園のコホート3について1年間の自然観察を実施し、特に5歳児11月から3月まで取り上げた。

2) 観察方法：原則として保育に参加しない観察者の立場をとり、午前中の自由遊び時間にビデオカメラを用いて観察した。学期終了時には、対象児の発達や仲間関係、保育について園長や保育者と話し合った。

3) 分析方法：ふざけ行動は、文脈や関係性によって影響される微妙な行為であるため、ふざけ行動のみを取り上げるのではなく、前後の文脈を含め、流れの中で捉えた。分析は、量的方法、質的方法を組合せて行った。観察によって得られた事例と、観察された内容や子どもの仲間関係の解釈等の妥当性を確認するために保育者へのインタビューを行ったほか、ふざけ行動の流れを数値化し統計的に分析しつつ、その裏付けとなる事例と往還して確認した。

ソシオメトリック・テスト

研究3では、クラス全員の写真を見せながら「一緒に遊びたい子」を尋ね、子どもがその名前と理由を答えるソシオメトリック指名法を、各時期に計8回実施した。結果として得られた相互選択や上位選択をもとに、男児集団のソシオグラムを作成し、コンデンセーション法(狩野, 1995)を参考に、上位相互選択で結ばれる集団のまとまり(コンポーネント)を作成した。そのまとまりをソシオグラムの図に重ね、時期ごとの男児の仲間関係とその変容を把握した。

倫理的配慮

研究1から研究3は1994年から1997年、研究4は1997年から2000年の観察・調査であり、当時保育現場での研究全てに倫理審査を求められていなかったため、観察調査の方法や内容、結果の公表について、丁寧に説明を行うなど出来る限りの倫理的配慮は行ったが、倫理審査を受けていない。また、2009年から2010年の観察・調査した研究5においても上述の倫理的配慮を行い、保育・学校現場での観察・調査に関する所属大学の規定に沿って実施したが、倫理審査を受けていない。

4. 結果と考察

研究1から研究5の概要

1) 研究1(第2章)では、幼児期のふざけ行動に、単に仲間と楽しむためだけではなく、仲間関係を操作する働きがあると仮説を立て、ふざけ行動が仲間関係の中でどのような役割を果たしているのか、その機能について検討した。ふざけ

の種類やふざけの流れとの関係を示すとともに、年齢差と性差を検討した。

その結果、大げさ、真似、からかい、言葉遊び、タブーの5種類と、関係強化 pos.、関係強化 neg.、緊張緩和、仲間入り、自己主張の5機能が見出された。発達差として、3歳児では大げさや真似が多く、からかいや言葉遊びは少なかった。言語的制約によって行動のふざけが多く、関係強化 pos.のような相手に受容されやすいふざけが多く、関係強化 neg.や緊張緩和のふざけは少なかった。5歳児では、からかいのような関係強化 neg.のふざけが多く、真似などの関係強化 pos.は少なかった。性差も見られ、男児は、からかいやタブー、緊張緩和や自己主張のふざけが多く見られたが、女児は、大げさや真似といった相手に受け入れられやすい関係強化 pos.のふざけが多かった。

2) 研究2(第3章)では、大人が望ましくないとするタブーのふざけが子どもにとってどんな意味があるのかを、3年間の縦断観察をもとに検討した。3歳児2月にタブーは多く観察され、5歳児には減少した。また、タブーはどの年齢でも女児より男児に多く見られた。タブーの種類や時期によって、タブー後に仲間関係が肯定的に変化する割合に差はなかったが、約7割が仲間との安定した関係の強化、不安定な関係の改善をしていた。事例では、仲間との不安定な状態を調整する機能があること、タブーを使って仲間関係を調整するスキルが3歳児より4歳児以降で巧妙化することなどが示唆された。

3) 研究3(第4章)では、ふざけが多く観察されたタクに注目して、幼児の仲間関係の変容とふざけ行動との関連について検討した。ソシオグラムの結果やふざけの事例から、タクは3歳児から4歳児頃までは、マサらの集団を居場所としていたことがうかがわれた。しかし、もともと運動や競争遊びを好むタクは、ごっこ遊びや製作を好むマサたちの集団が結び付きを強めると入りにくくなり、徐々に離れていった。5歳児になると、運動や競争遊びを好むサトたちの集団へと居場所を移した。「からかい」のふざけの多いタクは、共に楽しめるサトたちのいる集団に居場所を見つけ、ふざけのやりとりが多く見られるようになった。ふざけの生起が仲間関係の変容と連動していること、ふざけの多いタクの特徴について考察した。

4) 研究4(第5章)において、大人しいが年齢が上がるにつれて、難しいことや新奇の場面などに抵抗を示すようになった「ちょっと気になる」リュウに注目し、リュウのふざけ事例(4歳児～5歳児)を取り上げた。リュウがどのようにふ

ざけて状況に対処するか、リュウにとってふざけがどんな働きをするのかを検討した。事例から、リュウにとっては、ふざけのやりとりが特定の仲間ヒロとのコミュニケーション手段として重要であり、関係構築や関係確認、関係強化の機能を持っていた。また、新奇の場面で生じた不安や緊張に対して緊張緩和するなど、困難に対処する機能も持っていた。リュウの敏感さによって生じる困難さに対し、保育者も難しさを感じながら個別に寄り添って対応している。また、リュウにとっては、抵抗を感じる場面で、自らのふざけを通して緊張緩和し切り抜けた経験に重要な意味があったことを指摘した。

5) 研究5(第6章)では、ふざけ行動を、遊びとの関連から捉えるため、幼小接続期にあたる5歳児後半に観察された、集中・没頭して取組んで継続した遊び(カンたちの段ボールの家づくり)の事例を検討した。継続した遊びが展開する中で示された、カンの仲間関係の変容と集中・没頭との関連、さらに葛藤・揺れ、ふざけを捉えて質的に考察した。集中・没頭した要因、遊びが継続した要因として保育者の援助や環境構成が重要であるとともに、葛藤や揺れ、弛緩・発散するふざけ行動が、遊びへの集中・没頭と遊びの継続を支えていた点について考察した。

5. 総括的討論

1) ふざけの機能：コミュニケーションの円滑さと葛藤・困りへの対処方略

ふざけ行動の果たす役割として、「関係強化 pos.」の機能が最も多く、「関係強化 neg.」の機能と併せると約9割を占めていた。発達差として、3歳児では「関係強化 pos.」が多かったが、5歳児になると「関係強化 pos.」は減少し、「関係強化 neg.」が多くなっている。性差として、「関係強化 pos.」が女児に多く見られ、「緊張緩和」「自己主張」が男児に多く見られた。女児は相手にも受け止められやすい、コミュニケーションを円滑にする機能のある「関係強化 pos.」で相手とながろうとしている。攻撃性のある、相手に受け止められない可能性もある「関係強化 neg.」や、ネガティブな状況を解消しようとしてふざけを行う「緊張緩和」の機能は少し高度であり、男児が主に挑戦していた。

「関係強化 pos.」の機能がコミュニケーションを円滑に進めるための役割を担っているのに対し、「緊張緩和」は葛藤・困りへの対処方略としての役割を果たしている。本研究では、ふざけ行動の機能として「緊張緩和」に焦点化し、ふざけ行動の「遊戯性」だけでなく、「支援性」についても明示した点が重要である。

また、機能ごとにふざけの流れの展開プロセスがある程度定まっていることが

示された。ふざけの流れのプロセスが、機能によってある程度定まることは、ふざけをする行為者にとって、先の展開を読みやすくなり、その場の状況に合ったふざけを行うことにつながる。ふざけをされる相手にとっても、行為者の意図を読みやすくなり、仲間とともにその遊戯性を捉えながら、ふざけを楽しむことがしやすくなる。コミュニケーションを円滑にし、葛藤や困りに対処するふざけの役割を、行為者と相手の双方が受け止めながら展開できるのではないだろうか。

2) ふざけと遊びとの関係：二面性・両極性による曖昧性と支援性を備えた行動

図2は、集中・没頭する遊びとふざけとの関連性を、ふざけ行動の役割とその意義を位置付けて示したものである。遊びに集中・没頭して取り組む場合、「挑戦」「困り、葛藤・揺れ」が見られる。ふざけ行動は、遊びが継続し展開していく中で、困りや葛藤・揺れに対処したり、緊張や集中を緩めてリラックスさせたりして、再び遊びへ集中・没頭して粘り強く挑戦することへつなげたり、気持ちを切り替えたり立て直したりすることを支えている。遊びでの挑戦、困りや葛藤は、学びの芽生えや社会情動的スキル（学びに向かう力）の育ちを促し、ふざけはそれらを支援する存在と捉えた。

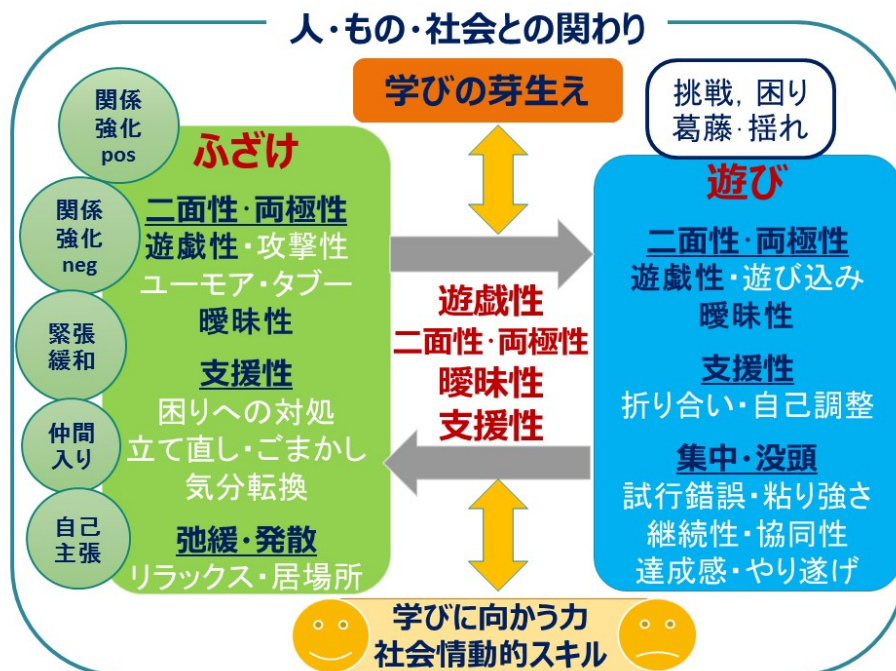


図2 遊びとふざけとの関連とふざけ行動の意義

「ふざけと遊びとの関係」について、「遊戯性」が前提として存在し、楽しさや面白さ、プレイフルであることが重要である。「二面性・両極性」についても、遊

びとふざけとの関係の中に存在する。例えば、継続する遊びの展開として、「集中・没頭」する遊びと、その途中の「弛緩・発散」するふざけは、遊びの継続に寄与すると考えられるが、継続する遊び全体として見れば「二面性・両極性」を示している。「二面性・両極性」から生じる「曖昧性」は、その状況や相手、タイミング等の微妙さによって、結果や展開が変わりうる。行為者側の相手への伝え方や相手側の解釈と対応に難しさが生じる一方で、その場で生成される面白さ、おかしさがある。「支援性」には二つの働きがあり、一つは葛藤や揺れの場面で何とか状況や相手との関係を改善しようと対処する働き、もう一つは「集中・没頭」する遊びの継続等による学びの芽生えや社会情動的スキルの育ちを、「弛緩・発散」するふざけが刺激となって支える働きである。以上から、ふざけ行動の意義と幼児教育での積極的な位置付けとして、以下の4点を挙げた。

- (1) 遊戯性を伴い、ポジティブなコミュニケーションを円滑に進めるためのものであること（遊戯性）。
- (2) いざこざなどのネガティブな状況に対応する対処方略となっていること（支援性）。
- (3) 集中・没頭や、集中・没頭することで生じる学びの芽生えや社会情動的スキルの育成を、弛緩・発散の一表現として支えていること（支援性）。
- (4) 二面性・両極性の特徴をもち、状況に応じて変容する曖昧性の高い行動であり、状況や行動から意図を読み取って判断するため、幼児にとっても保育者にとってもスキルを高める機会となりうること（二面性・両極性、曖昧性）。

6. 今後の課題

本研究の限界と今後の課題として、以下の3点を挙げたい。

- 1) ふざけ行動が男児に多い行動であったため、男児を中心とした仲間関係の把握となっている。女児にとってのふざけ行動の役割、ふざけ行動を受けとめる意味についても捉える必要があるだろう。
- 2) 幼児のふざけ行動を、社会情動的スキルや学びと関連づけて考察したが、実際に子どもの認知的発達や社会情動的発達を測定していない。今後ふざけ行動によって、どのような影響や効果があるかを捉えていくことが考えられる。
- 3) 幼小接続期も含めた小学校以上のふざけ行動、ユーモア行動、攻撃行動とのつながりを捉えることも必要だろう。小学校入学した子どもが、入学に伴う戸惑いの中どのようにふざけ行動を行うのか、小学校教師がどこまで受け入れたら、ユーモアとして活用したりするのかについて、今後の検討が可能である。